

鹿島神宮蔵黒漆居木の修復処置受託研究報告第35号

著者	中里 壽克
雑誌名	保存科学
号	14
ページ	77-86
発行年	1975-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1440/00003302/



鹿島神宮蔵黒漆居木の修復処置

受託研究報告 第 35 号

中 里 寿 克

1. はじめに

鹿島神宮には重要文化財に指定された、室町時代と思われる梅竹蒔絵鞍があり、現在これには榊枝に四手蒔絵の居木を伴って一具としている。しかし、この居木は、鞍橋との結合のための紐穴などはまったく合致せず、いまは不自然な姿に組立てられている(図-1)。同宮にはこれらとは別に黒漆塗無文の居木があり、これが「鹿島神宮宝物図鑑」¹⁾の解説にも述べている様に梅竹蒔絵鞍と一具をなすものであらうと考えられる。ただこの居木は上記宝物図鑑発行当時(昭和14年)、すでにかなり虫蝕、腐朽をうけて原形をそくなっており、この為鞍の重文指定の際も、蒔絵が施こされ居木先も比較的残存した別物の居木を転用して一具としたものであらう。しかし本来この鞍と一具をなすべき黒漆無文の居木は重要な遺品であるので、修復技術部では文化庁美術工芸課と、鹿島神宮の要請を受けて昭和48年度の受託研究として木質の強化と漆膜の保存処置を行った。この処置にあたり鹿島神宮宮司 東 実氏、同権宮司 萩原正彦氏の御配慮と文化庁美術工芸課 鈴木友也調査官の御助力に先ず感謝の意を表しておきたい。又この居木の処置の施工に直接たずさわっていただいた漆芸家新井榛名氏にも謝意を表したい。

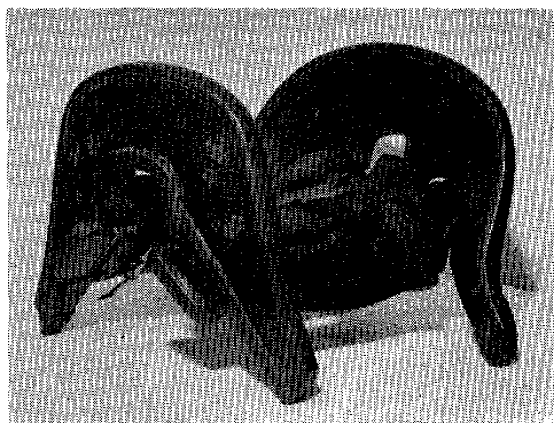


図-1 梅竹蒔絵鞍の現状

2. 居木の漆芸施工

この居木は通行の様に夫々前後に木目の通る一材から彫出している。木表には導管が認められ、木口には桐材に似た幅広い木目(最大7.8ミリ)が見られ樹種は明らかではないが、広葉樹である事がわかる。古来居木にはみずき、さわぐるみ、ねむのきを用いたといい、又柚木も用いられたと云う。鞍は強く乗るときしみて火を生ずる事があるが、これらの木はこの様な事がないと云われている²⁾。近年になってはぶな材が主に用いられた様である。

塗漆施工は、まず両端の居木先部分の表面のみに布着せを行い、側面から裏面に折曲げて縁近くで止める。先端の部分は木屑を盛上げて一段高くしている(図-3)。居木の表面は素地の上に木屑状のものを全体に薄くつけるのが見られるが、漆下地は認められない(図-4)。塗漆は数回で上塗は透漆様の少し栗色をしたものを塗立てている。裏面は若干施工が異なり、素地の上に直接黒漆を2回ほど塗るだけである。

以上の様に塗漆施工は比較的単純なものであるが、漆下地を行わず木屑状のもので素地を覆う施工は木造彫刻的であり異色である。これを形体の修正用として用いたのか、漆下地のか

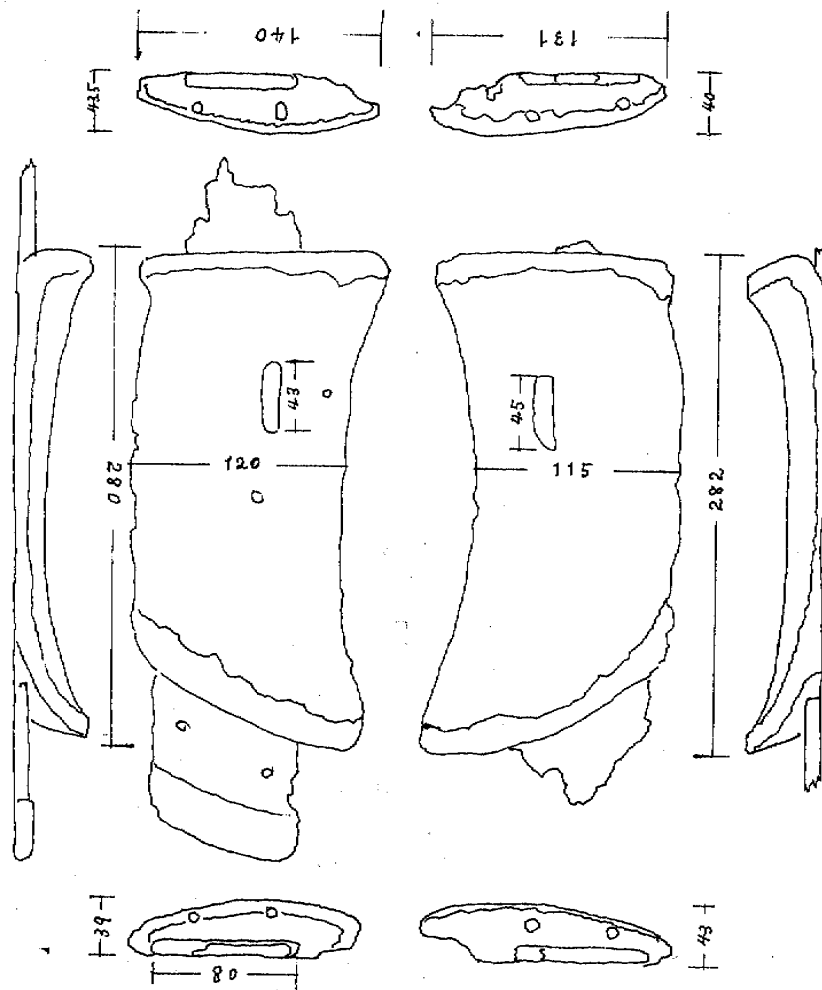


図-2 居木実測図

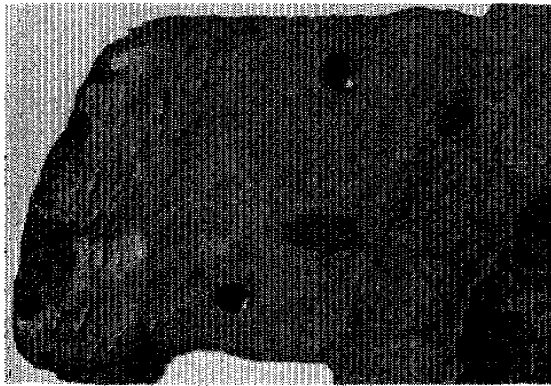


図-3 居木先の布着せ及び木罫盛上げ部分

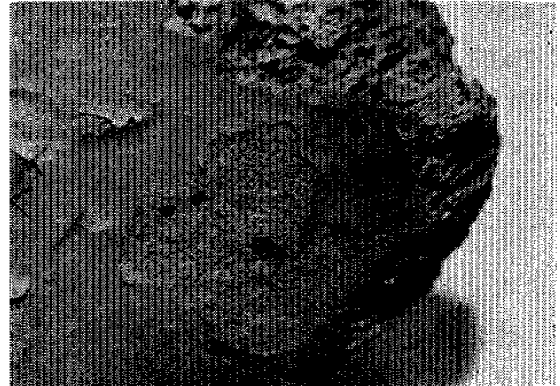


図-4 居木表面の木罫様施工

わりに用いたのか明確でない。又居木先に施す布着せにしても、補強用としては簡略にすぎ慣例的に行った様な所が見える。

3. 居木の現状

2枚の居木は木質部が虫蝕によって海绵状となり、更に腐朽によって全体がかなり脆弱化している。又木目にそった木痩せにより漆膜に断文が生じ、漆膜の剝離剝落が全面に見られる。

前後輪に接する山の部分は、2枚とも稜部が欠損、変形し、居木先も左居木の後方のものが

辛うじて原形を保つが前方のものはほとんど形を失い、右居木も後方のものは若干残存するが前方のものはほとんど破損している。裏面では塗漆が一部残存するが、全面積の3分の2程は虫蝕によって欠落し木肌を露出している。

「宝物図鑑」に掲載の本品と比較すると、木質の虫蝕状態や破損状態は現在とほとんど変る所はないが、当時見られなかった漆膜の断文とその剝落が著しく進み、35年の年月の経過を物語っている（付図—8）。

4. 保存処置

i) 保存処置の方針

処置にあたって、まずこの脆弱化した居木をどの様に修理するかを検討したが、文化庁美術工芸課と合議の結果、復元的修理はさけ、現状保存にとどめる事とした。

最も破損のひどい居木先は、残存部を参考に復原する事が可能だが、復原出来たとしても木質部の強度を考えると再使用は不可能であり、形だけの復原はあまり意味がない。もし後年梅竹蒔絵鞍を正しい姿に戻そうとする意向が出た場合は、この居木を使用せず、この居木をもとに模作して用うるのが望ましい。この考え方から木質部は強化するだけとして成形はせず、危険な状態にある漆膜のみ旧状で安定させる事を保存処置の方針とした。

ii) 木質強化処置

腐朽した木材に対する合成樹脂による強化は、すでに実績があり³⁾、イソシアネート系の樹脂である PSNY—6、ウオシュコートによる強化が有効である。この居木に対してもこれらの樹脂が適当であると判断し、予め腐朽状態の似通った他の試片に含浸させ、色相や強度をテストした。以上の合成樹脂の特徴として前者は強度に優れるが固く、濃いぬれ色になる。後者は若干強度が劣るが弾力がありぬれ色も淡い。テストの結果ウオシュコートを含浸させる事にした。まず右居木には 100 g を含浸させ、左居木には 100 g ずつ3回にわたって計 300 g 含浸させた。含浸後漆膜表面の残液は無水シンナー（醋酸エチル）でよく拭きとり、表面に残らない様にした。硬化は出来るだけゆっくりの方がぬれ色がおさえられるので、乾燥箱に無水シンナーを入れ、溶剤雰囲気中で硬化させた。硬化後若干漆膜上に残留したが、小刀で丁寧に削り落した（図—5, 6, 7）。

iii) 漆膜の接着処置

木質部が強化された所で、漆膜の接着及整形を行った。初めは麦漆と木屎による接着を試み



図—5 洗ビンによるウオシュコート含浸



図—6 無水シンナーによる表面残液除去

一部実施したが、漆膜のつっぱりが強い所があり、おもしろを置くなどの固定の方法に限度があって、漆の乾燥も悪く作業が捗らないので、アラルダイト SV 426 に代え接着する事にした。

漆膜の破損の状態は様でなく、反り上るもの、位置が移動しているもの、陥没するもの、ふくらんでいるもの、内部が空洞になるもの等がある。

反り上るものは内側に SV 426 を充填し、上から画鋏やおもしろでおさえ接着した。位置がずれるもの、陥没するものは旧位置に戻す様にした。漆膜がふくらんでいる所は内側を充填させるだけにした。内部が空洞で漆膜のみが蓋状に覆っている部分が居木先の布着せの所などに見られたが、ここはその一部を割って穴をあけ、SV 426 又木屑を十分に詰め、漆膜をかぶせた(付図—5)。裏面は漆膜のみの為、細かに剝離しており、これらは一つ一つ木屑又は SV 426 を針の先で充填して固定する様にした。海綿状の木質部が露出する部分は、木屑をこまかにつめて強化した。

一応漆膜を固定した所で、漆下地に光明丹を入れた黒下地を作り、漆膜欠損部にこれをつめて平滑にした。SV 426 又木屑が露出する所等も、これで色づけし全体の色調を整えた。裏面でもこの黒下地をもって木屑又 SV 426 充填の部分に色づけし、又見苦しい剝落の痕跡の一部も黒下地で埋めて漆膜の剝落個所を目立たない様にした(付図—3, 4)。

5. 結 語

著しく破損したこの2枚の居木は、以上の様な木質強化処置と漆膜の接着によって一応安定した姿にする事が出来たが、特に、伝統的な漆芸技法による処置を第一と考えて、それでこなし切れない部分に科学的な技法を応用するという方針で行ったことを、ここで強調しておきたい。処置前の重量は右居木が 230 g、左居木が 277 g あったものが、処置後には各 296 g、326.5 g になった。この増量の多くはウォシュコートによるものであるが、木質部はまだ完全に強化されておらず、多少木質の欠落が見られる。しかしこれ以上の含浸は質感を著しく損ねる恐れがあるので、後は周到な管理によって保存さるべきものである。

地味な仕事ではあったが、重文の鞍と一具をなすこの居木の保存処置は大きな意義があったと考えられ、近い将来居木の復元をはたし、梅竹蒔絵鞍が正しい姿で観賞出来る様になることが切望される。尚この居木の保存処置完了後、鞍橋に取付けて組立ててみた所、紐穴も合致し、鞍橋との接する面の割りもなじみよく合致した。この結果から本居木は重文梅竹蒔絵鞍の居木である事はほぼ間違いないものと確認することが出来た(付図—6, 7)。



図—7 居木処置作業

付記 梅竹蒔絵鞍の漆芸技法について

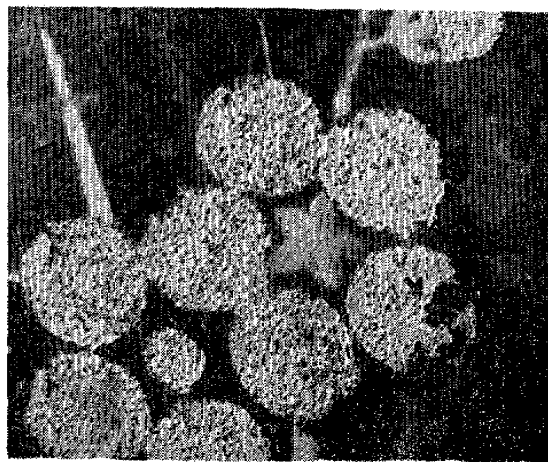
この鞍と一具を為すと考えられる居木の製作技法については先に簡単に述べたが、この鞍橋の漆芸技法についてもふれておきたい。

素地は破損や割損なく完好だが、後輪は多少変形してシンメトリーになっていない。この上に薄く漆下地をつけるが、布着せは見られず、又居木に認められた様な木屎状の下地は見られない。塗漆は薄く、上塗には透漆様の漆を塗るが、赤褐色となり、所々中漆と思われる黒っぽい漆が透ける。良質の漆とは思われず、光沢もなく肌合がよくない。

この上に前後輪とも表面には梅枝と竹をからませた文様を描き、内側には笹の様な枝を付書き風に少し肉をもたせて金平蒔絵する。この梅花に蒔いた錫は錆化の為にほとんど痕跡のみになっており、漆面より一段凹んで、ざらざらとした石目状になっている。この様な状態である為に一見して錫平文の痕跡の様にも見受けられるが、良く観察すると花瓣の所々に上塗と同じ漆面が見られ（図一8矢印）、平文でなく錫粉蒔きによる技法である事がわかる。したがってこの梅花は錫粉を蒔き分けて研出して表現し、その後金で竹枝等を上書きで描いたと考えられる。ただ不思議なのは、枝や蕾の蒔絵の部分に下の漆膜から錫粉が錆びて噴出している所がある。これは推測するに梅花に錫粉を蒔くと同時に置目にも蒔いたと考えられる。

蒔絵粉は思ったよりも粗く5～8号のものであるが、前輪では磨滅による欠損がひどい。これは蒔っぱなしによるものであろうか。蒔絵用の漆は絵漆（辨柄漆）と考えられ、粉落失部分に上塗の漆より少し赤味をおびて残っている。したがって粉が落ちてでも文様は比較的明確に窺う事が出来る。ただこの絵漆は盛上りがほとんどなく上塗を赤く染めた様に平滑になっている。

以上鞍の蒔絵技法について述べたが、梅花のみ研出しにした理由はここでは明確にし得ない。中世における錫平文は古神宝類などに受つがれ散見出来るが、この鞍も製作技法から推して神前に奉納された神鞍であったのであろう。



図一8 梅竹蒔絵鞍の梅文の部分

文 献

- 1) 大場磐雄編「官幣大社鹿島神宮宝物図鑑」昭和14年
- 2) 農商務省山林局編「木材の工芸的利用」明治45年
- 3) 樋口清治「木造建造物化粧部材の保存と修復における合成樹脂の応用」保存科学 第10号 昭和47年

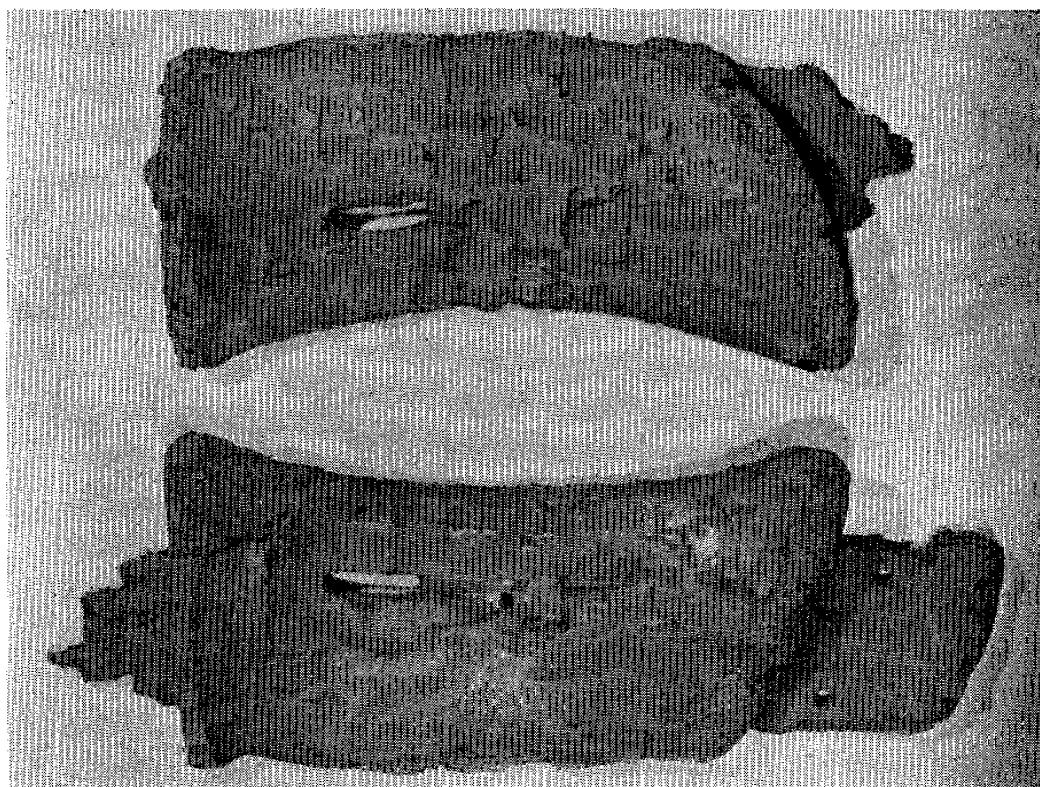
Résumé

Toshikatsu NAKASATO: Reinforcement and Conservation Treatment on "Igi" of Lacquered wooden Saddle: Property of the Kashima Shrine

The subject is a pair of "igi" bars, parts of the tree of lacquered wooden saddle estimated to date back to the XV th Century or thereabouts. They seem, originally, to have belonged to a gold makie lacquered wooden saddle patterned with bamboo and plum blossoms, which has been registered to important cultural property. It is not known when these bars were detached from the saddle, to be kept separately. The wood itself is so damaged by insecto biting that it looks like a sponge, while lacquer layers are either cracked or warped, if they have not already peeled off.

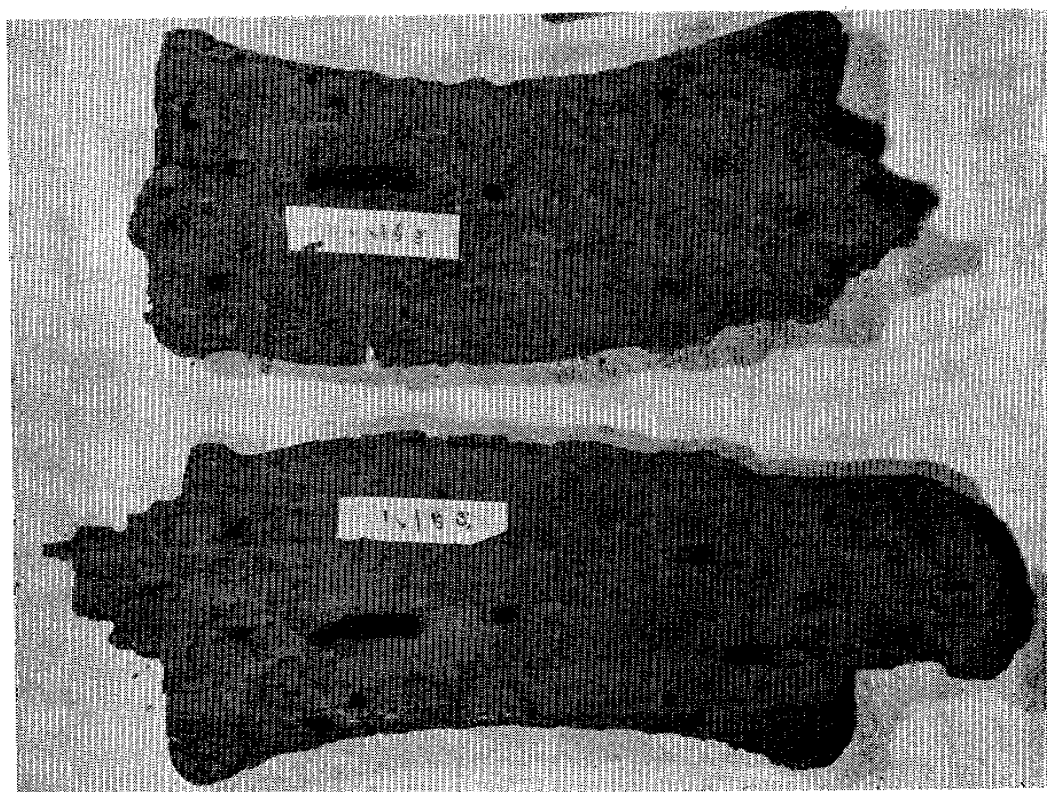
The following is an outline of the conservation treatments. For the reinforcement of the wood, isocyanate type resin (washcoatB) was used, 300 g of which was instilled into the left "igi" and 100 g into the right. The superfluous liquid left on the surface was washed away with ethyl acetate. The hardening prscess had to be a slow one, so as to preclude gloss. Next to the reinforcement of the wood, an attempt was made mainly with Epoxy resin (araldite SV 426) to check the warping and peeling off of lacquer layers. As for the parts where no more lacquer layers remained, the first coat of lacquer was given to cover up the surface.

The aim of these conservation treatments was to preserve the present state of the subject, and not to restore it to its original state.



表面

付図—1 処置前



裏面

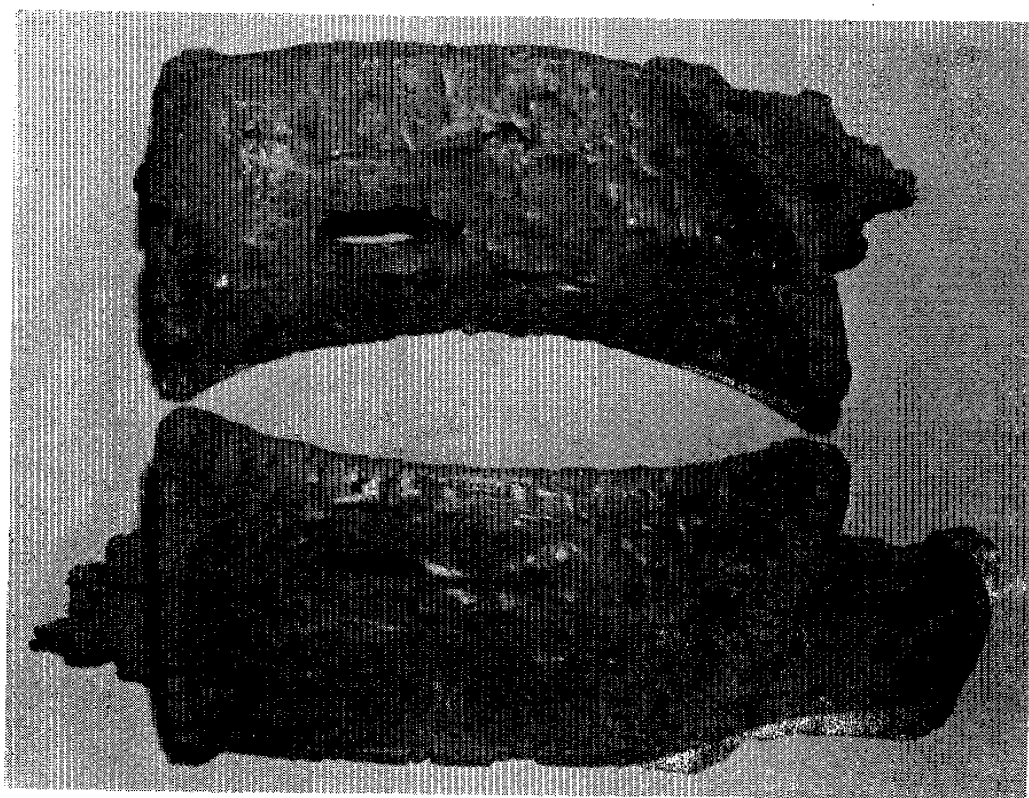
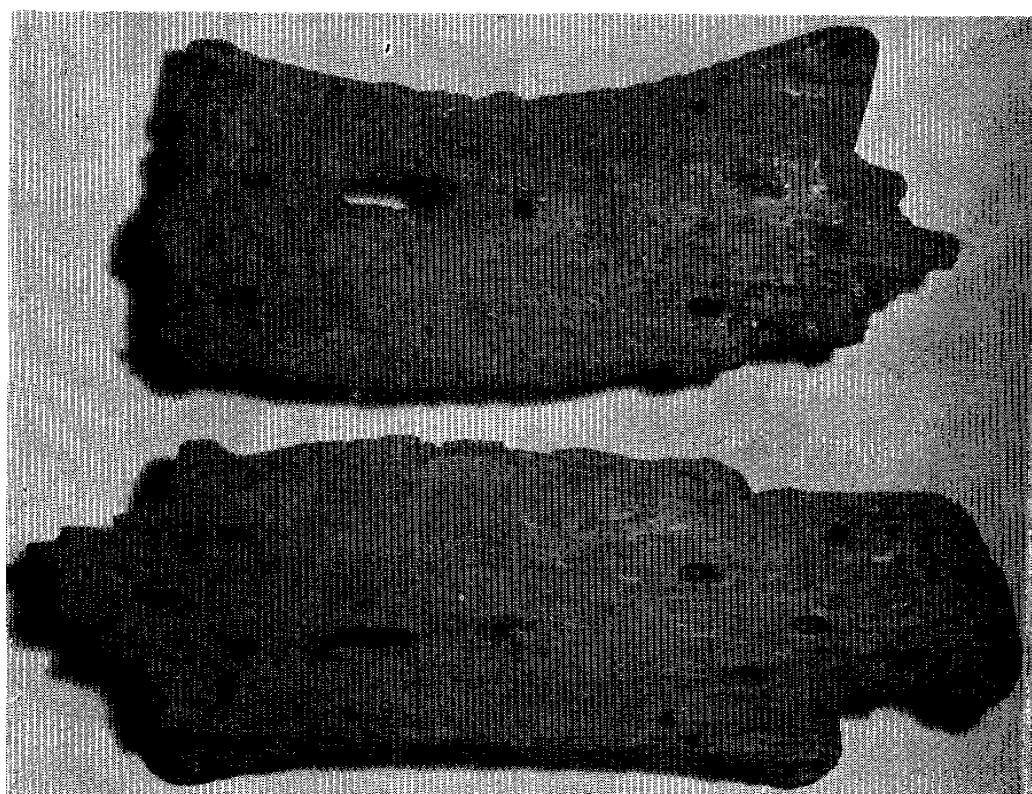
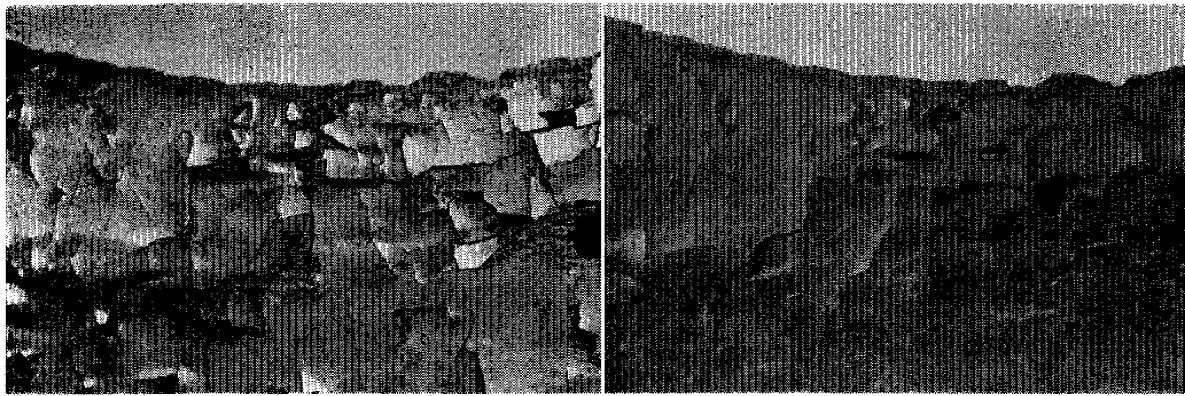


表 面



裏 面

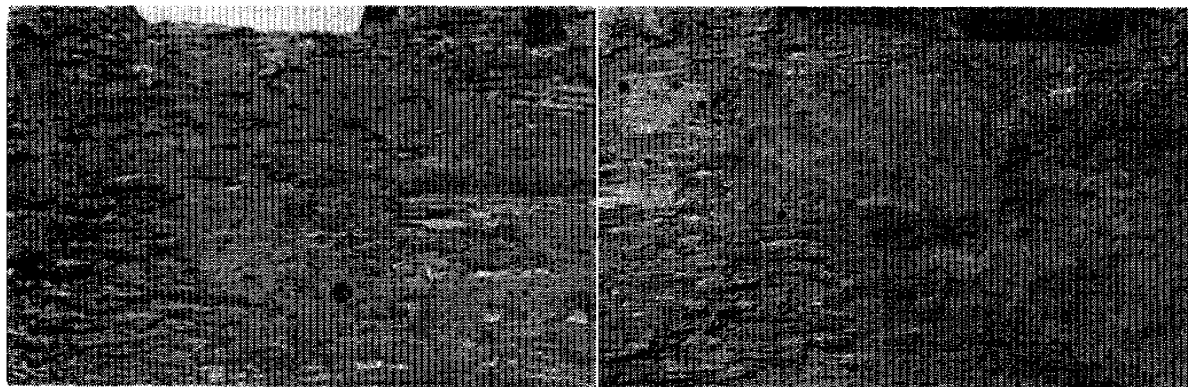
付図—2 処 置 後



表面処置前

同 処置後

付図—3



裏面処置前

同 処置後

付図—4



空洞部処置前

同 処置後

付図—5

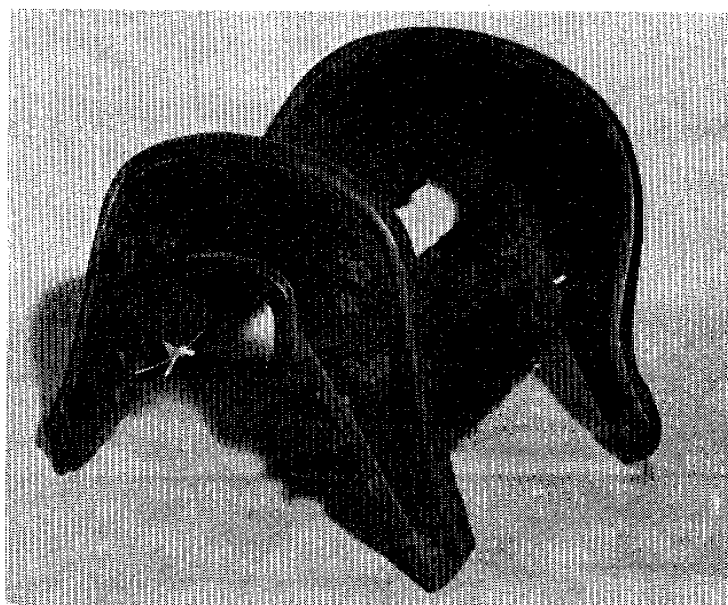


処置した居木による組上

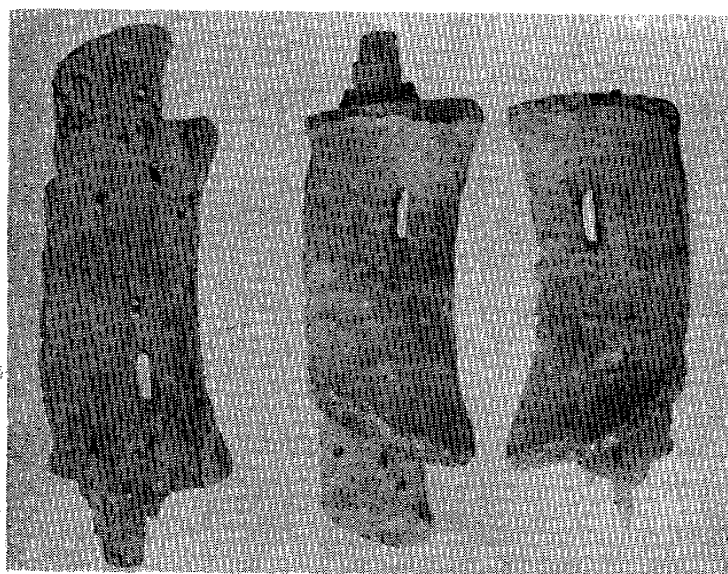


現状の組上げ

付図—6



付図—7 処置した居木による組上



付図—8 「鹿島神宮宝物図鑑」掲載居木